

「海道東征」を聴いて

海部 元 陸士 61

●交声曲「海道東征」は皇紀2600年の奉祝演奏会で演奏されるべく日本文化中央連盟によって委嘱された曲である。西暦1940年といえは日中戦争が泥沼化し、前年にはヨーロッパで第二次世界大戦が勃発していた時期でもあった。中止された東京オリンピックの穴を埋めるべく皇紀2600年の奉祝と言う行事が企画され、日本の歴史と伝統を広くアピールするためには、様々の分野の芸術作品が作られ発表された。「海道東征」はその一環として作られたものであるが、初演当時から名作と讃えられ、終戦までに全国各地で67回、演奏会で取り上げられた。

(今の宮崎県)に生まれたカムヤマトイワレビコ(後の神武天皇)が、海を渡って東へ進み、行く手を阻む軍勢を打ち破って大和(奈良県)を征服するまでを描いている。第8章のフィナーレでは神武天皇が橿原宮で即位する場面が取り上げられ、2600年前前日本という国を創成した神武天皇の偉業を讃えるとともに、「八紘一宇」を成し遂げ、日本が益々繁栄しますようにという願いを謳いあげている。そう総括できるだろう。

●しかし1945年の敗戦以降、「海道東征」は日本の音楽界の表舞台からその姿を消す。戦時中国威発揚の行事でとりあげられた曲であるということがその主な理由だが、信時潔という作曲家が、軍歌「海ゆかば」の作曲者でもあったので、「海道東征」という曲について語ることさえタブー化され、日本の音楽の「黒歴史」として葬り去られたと言った方が正確かも知れない。

●平成29年4月19日東京芸術劇場コンサートホールでは東京フィルハーモニー交響楽団(大井剛司指揮)による交声曲「海道東征」が演奏された。(神坐(かみま)しき、蒼空(あおぞら)とともに高く、み身坐(みま)しき、皇祖(すめらみおや)のつけから祝詞調の重厚かつ壮大な雰囲気です。聴衆を神話の世界へとといざな

●にもかかわらず私は約75年の長きにわたりこの格調高き名曲の存在すら知らなかったのである。都留文科大学教授新保祐司教授の「神武東征と交声曲『海道東征』の復活」と題する講演に接し、ようやくその存在を知り、東京での演奏会を待ち焦がれたのであった。「海道東征」で歌われる内容は、古

う交声曲「海道東征」の第1章「高千穂」の冒頭部分である。作詞は北原白秋。すでに晩年で目を患いながらも渾身の力を振り絞って書き上げた。それを受け取った信時潔は「北原先生の詩の見事さに力を得て曲の大骨の見当がついた」と賞賛する。難解の白秋の詩に信時先生が付けたメロディに乗ると詩の心が入ってくる。やまとは国のまほろば第2章のまだ見ぬ大和の国への憧れを歌う。心地よく揺れるリズムで、豊かな水と自然を讃え、第3章でいよいよ日向の美々津港からの旅立、第4章、船出にあたり旅の安全祈願をバリトンが朗々と歌いやがてオーケストラと合唱、ソリストたちが威勢のよい船歌を奏でる。「ヤアハレ」という掛け声も楽しい。趣向の異なる歌をつなぎ合わせる第5章の多彩さは、抑えた調子で同じ旋律を繰り返す第6章と対照をなす。第7章は大和への勇壮な進軍であり、後者の管絃楽が激しい戦闘を暗示して第8章の厳肅な気分を導く。終曲が第1章の音楽に戻り、見事に円環を閉じる構成である。

西洋の大家は最後に歓喜のクライマックスを作るが「海道東征」は環が閉じるように静かに終わった。

●ひたすら待ち続けた名曲は、さすがに日本人の魂を揺り動かす作品、自然と涙がこぼれてくる作品であった。

具体的には天照大神の末裔で高千穂

年末のベートーベンの第九もすばらしいが、日本人であれば年初に挙って「海道東征」を聴くべきではないか、としみじみ思ったものである。万雷の拍手しばしホールを埋め鳴りやまず、引き続き信時潔作曲の「海ゆかば」をソリスト、ホール一杯繰り広げられた。まさに感激の極み、日本人に生まれた幸せを真剣に感じたものである。

●私は古典音楽を聴くことは好きであるが、音楽を解説し論評することなど生来極めて不得手であると自認している心算であった。以前からともに東京公演を待っていた「花だより」担当者の飯田正能君の病状が急変し、因らざるも演奏日の4月19日午後9時頃遂に力尽き幽冥境を異にしたのであった。さぞ残念であり、悔しかったことであろうかと思えば胸が痛む。

●飯田君と私は餓鬼の時代に共に大阪陸軍幼年学校で信時潔作曲なる校歌を歌った同期、同訓育班の仲間であった。飯田君は、成績優秀、品行方正の模範生徒であり、社会に出て、陸士、陸幼会の世話役、特攻勇士の慰霊など頭の下がる思いであった。去る3月末、「海道東征」の感想文を「偕行」に投稿するよう、依頼の手紙を受けた。不適任を承知で彼の遺言と肚を括り、こんな拙いものをデッチあげた。どうか許してもらいたい。